

# 136

2022 SPRING

## 美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 7

山口松太  
《乾漆油漆堆錦筒形箱「アンドロメダ」》(部分)  
平成14(2002)年  
乾漆、堆錦、螺鈿、蒔絵  
44 × 10 × 8cm



岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



たか はし しゅう か  
高橋秋華

中村 麻里子(副管理者)

つい先日、高橋秋華作《外金剛図屏風》を当館へ寄贈したいとお申し出を頂戴した。本図は平成18(2006)年7月19日～8月20日の間、郷土ゆかりの日本画家・高橋秋華(1877-1953)の画業を紹介する展覧会に展示されたものである。同展は当館所蔵品を紹介する「岡山の美術展」の一画、2階展示室1200㎡のうちの600㎡を使った特別企画であった。この《外金剛図屏風》は既に当館所蔵品となっている《海金剛図屏風》とセットで1双となるもので、《海金剛図・外金剛図》として秋華生前の刊行になる『秋華画観』(1940年刊)にも図版掲載されている。朝鮮半島の金剛山の雄大な景観が水墨にて描かれている本図は、秋華の没後《海金剛図》は秋華長女宅、《外金剛図》は4女宅にてそれぞれ大切に保管されてきた。それが近い将来再び1双屏風として、また当館所蔵品として「岡山の美術展」にて紹介できる日がやってくる。

秋華は邑久郡幸島村東幸島清野(現在の岡山市東区西大寺)に、高橋松太(号・桂雨)と妻駒の間に生まれた。本名敏太。父松太は村長などを務める傍ら、華道・茶道・書画・俳句などをたしなむ風流人であったという。父の意向で秋華は大阪の叔父宅から銀行に勤務したが続かず、本人は岡山に戻り石井金陵(1842-1926)に南画を学ぶ。金陵の師・岡本秋暉(1807-1862)に私淑した彼は、その一字をとった「秋華」という号を自身で決めたという。郷里での作画だけでは満足せず、京都に出て都路華香(1871-1931)、ついで山元春挙(1872-1933)に師事し、春挙の画塾早苗会に所属。明治36(1903)年第5回内国勸業博覧会の出品作《幹信》が褒状を受け、同39年の日露戦争 戦捷記念博覧会には《獲物》が一等賞金牌を受賞する。同44年の第5回文展には《春日野》が初入選、以後入選を重ねる。賀陽宮家や久邇宮家からの作画依頼を受けたり、日仏交換美術展(パリ開催)に出品した《牡丹図》がフランス政府の買上げになるなど、人気作家となった。51歳の時、明治神宮聖徳記念絵画館の壁画を拝命されたのを契機に、宝塚にアトリエを建てる。昭和5(1930)年に完成した明治神宮聖徳記念絵画館の壁画第1図《御降誕御産殿図》は代表作である。

2006年展示風景 《海金剛・外金剛図》



高橋秋華《春秋》1920年 上から右隻、左隻

昭和22(1947)年岡山へ帰郷し、同27年に亡くなるまで故郷岡山で過ごした。

彼の早期作品は、戦争でほぼ失われたとされる。おそらく明治43(1910)年、34歳で手がけた餘慶寺恵亮院(瀬戸内市邑久町北島)の襖絵(現在は4曲屏風3隻に改装)《竹に虎図》が、現存する最も早い時期の作であろう。本図を制作した明治43(1910)年当時の落款は、「明治四十有三年桃花之季 秋華敏」と記しているが、後年次のように追記している。

「曩偶々訪當院見余往年揮毫之此図則不堪懷舊感慨之情剥落甚敷不忍見依而再来並補筆 時干昭和二十有七年春 七十六翁 秋華」

34歳の若き時代に描いた虎図の襖と、40年余りに後に餘慶寺恵亮院を訪れた際に再会し、感慨深く思った秋華であったが、剥落して傷んだ様子を見て忍びない気持ちになり、再来して補筆したのである。当時の情景が、款記によって追真的に伝わってくる。3隻には竹林とともに①寝そべる虎、②吠える虎とその尻尾にじゃれる仔虎、③振り返り牙を剥く虎が描かれている。岡山県東部には今でも根強い秋華ファンがいて、本図も「八方睨みの虎」と呼ばれて親しまれ、昭和時代には個人所蔵の作品を集めた展示も行われていたようである。

先述の《外金剛図》屏風とは別件で、《春秋》(6曲1双屏風 1920年)を寄託したいというお申し出もいただいた。この《春秋》は右隻に「秋華逸民寫於聽鶯居画室」、左隻に「大正庚申之春於寫聽鶯居中 秋華逸民」と落款があり、大正9(1920)年に制作されたことがわかる。この「聽鶯居」とは秋華の京都在住時のアトリエのこと。宝塚在住時代は「巢雲松居」、岡山の西大寺時代は「曲水居」と称しており、別に「墨香窟」というものもある。この屏風に関わる秋華書簡や覚書も複数残されており、右隻は「柳陰閑居図」左隻は「秋林漫步図」であること、筆料は700円であることなどが記されている。

この2件のお申し出が偶然にも続いたことで、筆者はこの3月末定年退職するまでに、高橋秋華について多少なりともまとめた文章を残さねばと強く感じた。2006年の展覧会から既に15年もの年月が経過しており、これまで手つかずであったことに秋華本人や遺族、所蔵者らに申し訳ない気がずっと続いていた。存命中は高い評価を受けていた秋華が、今後も等閑視されることなく、当館収蔵作家として「岡山の美術展」等で紹介していく必要があると考える。詳細については当館紀要12号(令和4年3月末発行)をご一読いただければ幸いである。



# 原田直次郎《素戔鳴尊八岐大蛇退治画稿》再考

橋村 直樹(学芸員)

先日、某テレビ番組の中で当館所蔵の原田直次郎《素戔鳴尊八岐大蛇退治画稿》(図1)について、とりわけ画面左下に描かれる犬について解説する機会があった。しかし、原田がなぜここに犬を描いたのか、私自身これまで十分には解釈できていなかったため、取材依頼が届いてからというもの、この作品についてあれこれと改めて考えることとなったのである。ここでは今回再考したことを簡単にまとめておきたい。

本作は1895(明治28)年の第4回内国勸業博覧会で妙技三等賞となった《素尊斬蛇》(図2)の画稿、つまり下絵である。出雲の斐伊川上流に天降った素戔鳴尊が八岐大蛇を剣で斬り倒すという記紀の名高い退治物語が主題となっている。一見して目を引くのは、あたかも絵の後ろからカンヴァスを突き破っているかのようにトロンプレイユ(だまし絵)的に描かれた犬の存在だ。関東大震災で焼失してしまった完成作にこの闘入犬はいないのだが、なぜ下絵では描かれたのだろうか。

1899年に36歳で亡くなった原田は、実は1893年頃から体調を崩し始めていて、本作を描いた頃にはすでに病臥中であった。そのため、思うように体が動かず、八岐大蛇の絡む首を上手く処理できなかったから、それを誤魔化すために画布を突き破る犬を「遊び」として描いたという説明がひとつには可能だろう。思い通りに絵筆を揮えない苛立ちや行き詰まりから、気晴らしや遊びとして描いたという、ある意味消極的な解釈だけでなく、画布を突き破る犬を描く積極的な理由があったとも考えられる。つまり、犬が突き破ったカンヴァスのめくれを描くことによって、この荘重な神話的場面が一枚の画布の上に描かれたものであり、崇高な神話画であってもしよせん絵は絵でしかないことを原田は伝えたかったのだ、という解釈だ。本作より5年前の1890年に原田は名高い《騎龍観音》(護国寺蔵)を発表し、観音と龍のリアルな描写や東洋の主題の導入などをめぐって外山正一から批判を受けた。それに友人の森鷗外が猛然と反論したことから歴史画論争として知られることになるのだが、原田自身はそれに我関せずで、公には何も応答しなかった。とはいえ、原田の心の中には、荘嚴な宗教画であろうと崇高な神話画であろうと、しよせん絵は絵でしかないのに、外山も鷗外も何を熱くなっているのだろうという思いがあったのではないだろうか。画布を突き破る犬を下絵に描いたことは、絵が絵でしかないことを宣言する原田なりのひそかなりアクションだったと思われるのだ。

画面を突き破る犬を描いた理由が何にせよ、かつて留学していたミュンヘンにおいて、西洋絵画の伝統にあるトロンプレイユを原田は目にしていたはずであり、そうした視覚体験からこのような表現を着想し得たことは間違いない。公にされない私的な下絵だからこそ、ユーモアや苛立ち、あるいは絵画的関心といった原田の心情や内面が反映されているといえそうだと。



図1:《素戔鳴尊八岐大蛇退治画稿》1895年頃



図2:《素尊斬蛇》1895年 1923年焼失

## 図案日誌

福富 幸(学芸課長)

2020年10月、第67回日本伝統工芸展岡山展(伝工展)の開会を目前にひとつの訃報が届いた。漆芸作家山口松太(1940-2020)、数年前から表立って姿を見ることがなくなり気にはなっていたが、静かな旅立ちだった。伝工展には昭和43年(1968)年初入選の第15回展から生前最後の出品となった平成24(2012)年の第59回展まで、落選したのはたったの3回。40年以上にわたり本県漆芸界のトップランナーとして走り続け、伝工展の他、漆芸部会展、中国支部展、岡山県展等に作品を発表、審査員や理事等の要職を務めるなど本県工芸界を牽引した。

没後1年を経たのを機に山口を偲ぶ展覧会を企画したところ、ご遺族やご所蔵者のご協力により日本工芸会総裁賞受賞作をはじめ伝工展に出品された主力の20点に木彫や蒔絵、存清、蒔醬など山口の多才ぶりを示す作品が数多く集まり、追悼展にふさわしい内容となった。

倉敷市に生まれ、中学を卒業後、木彫を学んでいた山口は漆芸家難波仁斎(岡山県指定重要無形文化財保持者)の作品に出会い、漆芸の魅力を知った。昭和41(1966)年香川県漆芸研究所で基礎を学んだ後、仁斎に師事、漆芸を初めてわずか数年、20代後半で県展、伝工展に連続入選入賞の快挙、若手漆芸家のホープとして注目された。仁斎の指導は手取り足取り技術を教えるというのではなく、折々に助言したり作家としての姿勢を見せるというものだったらしく、その後、再び漆芸研究所の研究員として当時の人間国宝(国指定重要無形文化財保持者)らにさまざまな漆芸技法を学び、研鑽したことが山口にとって大きな糧となったようだ。

家族の元に100冊以上のノートが遺る。確認できる一番早いものは昭和48年(1973)で最後は平成23年(2011)、古いノートには大場松魚や田口善国といった先達から受けた講義メモもある。日々のスケジュールや知人たちとの往来などが日記や備忘録のように綴られるとともに虫や花、鳥などの写生、器物の形や文様のデザインがほぼ毎日、何ページも何年にもわたり描き留められている。中には作品になったものも散見するが、多くは作品にならないアイデアスケッチだ。あるページに、中国支部50周年記念展出品作《寝にもどる》について「(前略)この作品は、20年近く以前のこと、倉敷の工房で飼っていた山雀の生態をスケッチしていたものから作品にしました(後略)」松田権六先生が図案日誌を必ず励行することと言われたが少しでも描き留めたことが今になって作品に出来ることは有難い」との記述が見られ、松田権六の教えでもあったのだろう。

生前、山口からは制作の裏話などあまり聞いたことはなかったが、ノートを繙きながら作家として立つことの礎に触れた気がした。



《蒔醬草雜文平盤(キンマ草文盤)》1967年



《乾漆堆錦箱「古陵想」》1999年 国(文化庁保管)

【岡山の美術 特別展示】「漆芸家 山口松太追悼展・もっと伝統工芸 備中漆展 2022」(会期:2022年4月22日~5月29日)



# 塩出英雄の画業—生誕110年を迎えて—

鈴木 恒志(学芸員)



塩出英雄《禅閣》1972年

塩出英雄(1912-2002)は広島県福山市出身の日本画家である。院展を中心に活動した人物で、同時期には片岡球子なども活躍していた。彼の作品には雲も太陽も月もない青空の下、鮮やかな色彩の山や草木を見せる風景を描いたものが多い。その清澄さゆえにややもすれば見逃されてしまいがちな彼の画業。当館では平成24(2012)年に「生誕100年塩出英雄展」を開催し、青年期から晩年までの作品を網羅的に取り上げてその生涯を振り返ったが、それからすでに10年が経過した。塩出の生誕110年を迎えた本年、改めて彼の事績に触れてみたい。

塩出は昭和6(1931)年に帝国美術学校(現武蔵野美術大学)に入学し、はじめ山口蓬春に指導を受けるとともに、金原省吾きんばらせいごに東洋美術史・東洋美学などを学び、同10年からは生涯の師となる奥村土牛に師事した。彼の特質として触れなければならないのは、画業以外への関心の広さと深さである。学生時代に宗徧流の茶道を学び十数年をかけて皆伝を得たほか、幼少期には地元の古刹・明王院の大僧正と親交をもち、帝美に在籍中から『大正新脩大藏経』の編者の一人である高楠順次郎に学び29歳を迎えると福山市の胎藏寺で受戒するなど、仏道、特に真言密教の高い知識を有する人物であった。加えて幼いころから歌を詠んだ塩出は帝美で歌人でもある金原に師事したこともあって、生涯を通じて多くの短歌を残している。彼は風景画をよく描いたが、写生の代わりに歌を詠むこともあったようで「写生よりも、歌を詠む気持で、風景を憶えてくる。歌のように憶えてくるんだ」と述べるほどであった\*。

今回取り上げる《禅閣》は、昭和47(1972)年の第57回院

展に出品された作品である。京都市右京区の山間に位置する常照皇寺に取材した本作は、青々とした樹木の中に静かに佇む舍利殿を描いている。遠くから眺めると本作の樹木部分は、ただ平坦に緑青を塗り重ねただけの単純なものに見間違えられかねない。しかし近づいてよく見れば、画面後方に林立する杉の先端部分や画面右の葉桜、そして画面左下の丸く刈りこまれた木々など、それぞれが異なる葉の表情を見せていることに気づく。樹木だけではない。舍利殿ごけらの柿茸ふきの木の板一枚一枚、白砂の庭の砂利一つ一つが丁寧に描きこまれているのである。その一方で改めて画面から離れて本作を見ると、それらが強く主張することなく深山の清浄な禅寺の風景として調和している。こうした描写には塩出の茶道や仏教に対する高い造詣も影響しているが、彼が師の金原から与えられ、終生座右の銘とした憚南田うなんんでんの『甌香館画跋おうこうかん』の一節が強く思い起こされる。

高簡は浅きに非ざるなり。鬱密は深きに非ざるなり。意は遠きを貴ぶ。静かならざれば遠からざるなり。境は深きを貴ぶ。曲らかならざれば深からざるなり。(以下略)

簡潔と仔細の狭間で卓越したバランス感覚を示し、清閑な情景をつくりだす塩出の絵画からは、彼が人生で会得した高い精神性の積み重ねのようなものが感じられる。今回紹介したのはその一端に過ぎないが、塩出の作品に向き合う際の序論となれば幸いである。

\* 有川文夫『如々庵随聞記 塩出英雄先生聞書』六藝書房、2004年448頁

# 展覧会スケジュール

4月  
April

2022年4月2日|土|—5月22日|日|

【特別展】

THE ドラえもん展 OKAYAMA 2022

「あなたのドラえもんをつくってください」。国内外で活躍する28組のアーティストたちに、こんなお願いをしました。1970年の誕生以来、日本中に夢を届けてきたドラえもん。みなさんの心の中にも、思い出のドラえもんや、いつでもそばで優しく助けてくれるドラえもんの姿が、刻まれているのではないのでしょうか。変わりゆくこの時代の中で、アーティストたちに「あなたのドラえもん」を表現してもらったら、どんな世界が生まれるだろう。何を願い、未来へ何を伝えてくれるだろう。2002年の「THE ドラえもん展」から20年。この展覧会のために、様々な発想や技法によって生み出された新たな作品をお届けします。

\*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。  
<https://okayama-kenbi.info>

4月23日|土| 14:00-15:30

【記念座談会】「山口松太氏を偲ぶ」

パネリスト 高山雅之氏(郷原漆器製産振興会会長)、北岡省三氏(漆芸作家)

聞き手 岩崎充宏氏(山陽新聞社論説委員会委員)  
会場 2階ホール(定員150名) ※聴講無料、申込先着順

5月  
May

4月22日|土|—5月29日|日|

【岡山の美術展】

第11回 I氏賞受賞作家展 李侖京・築山弘毅

【岡山の美術展】

漆芸家 山口松太追悼展・

もっと伝統工芸 備中漆展 2022

【岡山の美術展】

安井家コレクション

5月8日|日| 13:30-15:30

【WS】「漆絵体験」

講師 塩津容子氏、井上みゆき氏(漆芸作家・日本工芸会正会員)  
会場 地下1階研修室(定員15名) ※申込先着順  
参加費 1,500円  
対象 小学5年生以上(体験中、漆を扱うため)

6月5日|日| 13:30-15:00

【記念講演会】「父・高木聖鶴」

講師 高木聖雨氏(書家・高木聖鶴氏長男)  
会場 2階ホール(定員150名) ※聴講無料、要申込・抽選

6月  
June

6月3日|金|—7月10日|日|

【特別展】生誕100年記念 高木聖鶴展

高木聖鶴(本名:郁太)は大正12(1923)年総社市に生まれ、終戦後、「仕事以外に生涯を通じて学べるものを」と書を選び、書家の内田鶴雲に師事。日本や中国の古筆を研究し、特に仮名書の頂点といえる平安期の古筆を徹底的に臨書研鑽し、優美さと鋭さを兼ね備えた独自の書風を打ち立てました。昭和25(1950)年日展に初入選して以後、同展や朝陽書道会展等に作品を発表。平成29(2017)年93歳で没するまで50年以上の長きにわたり、自身の書作に励むとともに日展審査員、朝陽書道会々長、日本書芸院理事等の要職を歴任。平成25(2013)年度には岡山県内在住者として初の文化勲章を受章するなど本県のみならず、日本の書壇の発展に多大な功績を残しました。本展は、高木の生誕100年を記念し開催するもので、各地の博物館施設や個人に収蔵される代表作、初期から最晩年まで約100点の書作を一覧するとともに、書家聖鶴の心技を育んだ愛蔵の古筆や文房四宝を展覧します。

6月3日|金|—7月10日|日|

【岡山の美術展】

撮影された岡山の人物と風景(仮称)



収蔵品の紹介 Vol. 7

山口松太《乾漆油漆堆錦筒形箱「アンドロメダ」》  
平成14(2002)年 乾漆、堆錦、螺鈿、蒔絵 44×10×8cm  
第49回日本伝統工芸展出品

渦巻き銀河のひとつ、アンドロメダをモチーフにした本作は、黒漆の上に金粉と堆錦、見え隠れする青紫の輝きは螺鈿で表されている。堆錦は、漆と顔料を練って餅状にしたものを薄くのばし、型抜きしたものを器胎に貼り付ける技法。一粒一粒丹念に貼り合わせるには大変な集中力を要する作業だ。漆黒の中に星屑のように煌めく様はまさに銀河を彷彿とさせる美しさだ。(福富)

### この1年

守安 収

1年という時間はあっという間ですね。年齢を重ねるほどそれを強く実感するようになりました。▼当館の令和3年度は昨年同様、新型コロナ感染拡大により展覧会予定の変更を余儀なくされ、年間スケジュールの印刷ができない状況でした。そのひずみはもっぱら岡山の美術展(常設展示)に押し寄せ、地下展示室などの空調工事も相俟って、岡山の美術展が開催できたのはほぼ4か月という有様。他方、特別展については延期などが生じたものの、何とか予定していたすべてを終えることができました。入館者数は想定の7割位くらいでしょうか、3月末で11万人弱となる見込みです。人数的には善戦といえるのかもしれませんが、教育普及事業は特に対面でのサービスが低下し、講座や講演会、フロアレクチャー等は3割の実施、毎年1回開催してきた「対話型鑑賞体験ツアー」は開けずじまいでした。ボランティアさんも「出てこられる範囲」での活動となり、いつものポテンシャルを保つことに苦労したようです。4月2日からは「THE ドラえもん展」。コロナが収束へと向かい、大勢の来館者をお迎えられることを願っています。▼20年来、とりわけここ10年余りの私の生活の中では浦上玉堂(江戸後期の文人 当館建設地にて誕生)に関することが大きな比重を占め、昨年5月には携わってきた『浦上玉堂関係叢書』(浦上家史編纂委員会編著 学藝書院発行)全巻(3巻4冊)が完結、刊行に至りました。でも、1年も経たずに最終巻『藝術編』に収めた「玉堂作品一覧表(526件)」に早くも20点ほど追加せねばなりません。私にとっては発見なので嬉しい悲鳴といえますが、ほぼ済んだと宣言できるのは一体いつになることやら……。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email [kenbi@pref.okayama.lg.jp](mailto:kenbi@pref.okayama.lg.jp)  
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分  
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませよう願いたします。

### 編集後記

中西ひかる

今号が皆様のもとへ届くころには、もう少しあたたかくなっているでしょうか。実は、この編集後記を書くよりも少し前、岡山市内では珍しく雪が降っていました。積もることはありませんでしたが、凍えるような厳しい寒さに春の訪れが待ち遠しいです。そんな待ちに待った春からは、一足先に「THE ドラえもん展」がスタートします。また、4月後半からは、新型コロナウイルスの影響で延期になった「I氏賞受賞作家展」と、「山口松太追悼展・備中漆展」、「安井家コレクション」が始まり、4展同時開催ととてもにぎやかになります。盛りだくさんな春の岡山県立美術館をどうぞお楽しみに。